
夜談

まがりまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜談

【Nコード】

N9682P

【作者名】

まがりまめ

【あらすじ】

蒸し暑い真夏の夜、階下の男を揺り起こすもう一人の男。

「君が死ぬ夢を見た――」

語り合ううちに見えてくる、人間の内面を描く。

「君が死ぬ夢を見た」

明治二十八年九月。まだ真夏の雰囲気を色濃く残した息苦しくなるような夜に、男は突然階下の住人を揺り起こした。布団の中でまどろみかけていた男は眠たげな目をこすり枕元に座っている男の影を見上げ、

「いきなり、どうした」

と返事をした。

「いきなり、ではない。君というものに出会ってから六年間の間、何度も見た」

「まだ君と出会ってそのぐらいにしかならんかね」

「話をそらすんでないよ。俺は幾度となく夢の中で君の死を見たのだ」

「ほう、となれば妙な具合だな」

「何がだね」

「あしは君に、君の夢の中で何度も殺されたことになる」

「それは君、お門違いな文句だよ。俺は殺したくて殺したんじゃない」

「そうかい。それなら何故君の夢の中であしは死んでしまったのか、その経緯を聞こうじゃあないか」

男はじつとりと湿った掛け布団を押し分け、影の前に胡坐をかいた。影も男が起き上がった気配を感じとると、正座していた足を崩した。

「あしが死んで、どうなってるんだい」

「たいていの場合、君は俺の近くでは死なない。どこか俺が遠くに直ぐには君の枕元に駆けつけられないような場所に居る時に、死ぬ。俺は君の死を知らないで、君の死の数日後にぽつりと一通誰かからの手紙が届くのだ」

「そりやさみしいな」

「今夜は是公とどこか異国にいた。是公と会って、久しぶりに浮かれていたというのに、君の訃報が届く」

「悪かったね」

「急いで帰国したら、君はもう墓石の下にきちんとおさまっているのだ。俺はその前でむっつりと黙り込む」

「あはは、なんだい、君は何時だってむっつりとだまりこんでいるじゃあないか」

「茶化すんじゃないよ、君。君が死んでいる話だぞ」

「そりゃあ、あしにとつては笑えない話だろうね」

ふと右耳を通り過ぎていった蚊を潰そうと闇の中で手を打った。しかし数秒後、蚊は左側を何事も無かったかのようにかすめていった。

「だが妙なのは君の墓前に立つてもいっこうに君が死んだとは思えないのだ」

「他人の死とはそのようなものじゃあないのか」

「そうかな」

「そうさ。死んだのが親しい者だったら、死なないで欲しい、まだ傍に居て欲しいと願って、それがずっと続いてひよっこりそこらへんから出てくるのではないか、死んだのはそれこそ夢だったのではないかと思うようになる。遠い者だったら会っても会わなくても同じことで、それで実感はわからないものさ」

「なるほど」

「さて、墓前に立ってどうなる」

「いつもならばそれで終わりだ」

「なんだ、君はそんなにつまらない夢を六年間も見てきたのか」

「毎夜ではない」

「そうだったら、さすがのあしも気持ち悪いよ」

「何を言うか。学生の時分にあんな手紙をよこしておいて」

「何の事だ」

「覚えてないとは言わせないぞ。俺が房総に旅行した時のやつだ」
「夏休みだな」

「そうだ。君は自分のことを妾と言い、俺を朗君と書いた」
「なんだい、ただの冗談じゃあないか」

「冗談でも酷いとその後手紙に書いてよこしたろう」

「病床で退屈だったのだよ」

「病床で考えることはろくな事じゃあないな」

「おい君。そしたらあしは年がら年中ろくな事を考えてないじゃないか」

「それだ。俺が君を夢の中で殺してしまう理由」

着物の合わせ目にじとじと流れ落ちる汗が浸み込んだ。背骨の辺りでもつい、と何筋か流れ落ちていった。

「あしが床から出れんから、君がそんな夢を見ると」

「そうだ」

「なんて理不尽な物言いだろうね。あしだってなりたくてなっていないわけじゃあない」

「分かっている。しかし君、考えてみたまえ。君は病弱なくせに兄貴面をしたがる。万年床から動けないような体で大将だ」

「何の話をしているんだい」

「君が無茶苦茶な男だって話さ」

「その無茶苦茶な男と喜んでつるんでは何処の偏屈だい」

「さあね。それより夢の続きだ」

「なんだ、あれで終わりじゃあなかったのか」

「いつもだったらあれで終わりだ。今夜は違った」

「だからあしを起こしたのか」

「迷惑だったか」

「いや、暑くて眠れないところだったから丁度良かったよ。それで、夢の続きを聞こう」

「うん。俺は墓前に立っている。俺以外に人はいない」

「そりゃ寂しいことで」

「俺はそこで生前の君の事を思い出すのだ。学生時代から始まって、死ぬ直前まで」

「妙な所は何処にもないね」

「それが妙なのだ。君、さっき俺は君が兄貴面をしたがると言ったな」

「言ったね。的をえてると思うよ」

「君は出会ったときからいろんな所へ俺を連れまわしたがって、俺はそれについていった」

「京都に行ったときの君は実に見物だったな」

「何の話だ」

「揚屋とも知らずに店先を歩いてて、そうと知った瞬間飛び上がった道の真ん中を歩き始めたじゃあないか。まるで女を避けるようにおびえてさ」

「笑うなよ。一寸吃驚しただけだ」

「初心な坊っちゃんが何を言う」

「ふん。何とでも言う方がいいさ。そろそろ美人な妻でもこしらえて、君を驚かしてやる」

「君に美人な妻かい。こりゃあ傑作だな」

「君に出来るよりは可能性は高いと思う」

「わからんよ。女は看病したがるもんだ」

「それは君、都合良く考えすぎだ。世の中の女子がそろいもそろって君の妹のようにはいかんよ」

「ならば妹のような気質を備えた美人でも探すとするか」

「見つかったら是非紹介してくれよ」

「じーわじーわと蝉がどこか近くで鳴き始めた。それが合図だったかのように、二匹、三匹と大合唱が始まった。

「話がそれた」

「何の話をしていたっけ」

「君の性格だ」

「そうだったな。それで、君はあしの事をどんな風に見ているんだ

い」

「大きな事を言う奴だな、君は。そしておだやかで自身にあふれていて、安定している」

「身体は不安定だがね」

「こころの話だ」

「君は大層不安定だからな」

「うん。そうだ、俺が君にこころのゆれを書き送るのが常だ」

「学生の時分からな」

「しかし夢の中では違ったのだ」

「ほう」

「学生の頃を思い出すとまだ君はピンピンしている。だが歳をとっていくにつれ、思い出される君の顔は泣いた顔や苦しそうな、そんな情けない姿なのだよ」

「大方君の想像の産物だね。あしは君の前で泣いた事は無い」

「泣き顔なんぞ、想像はつくさ」

「君の泣き顔は何度も見た」

「何度も、ではないだろう。あっても一、二回だ」

「そんな事ない。君は実に精神が不安定なもの」

「となると、君」

「何だい」

「俺と君との不安定な部分をあわせたら、どんな男が出来るだろうね」

「唐突だなあ」

「面白いと思わないか。身体も駄目、こころも駄目」

「それで君、生きていけるのかいその男は」

「俺と君だってなんとか生きているじゃあないか」

「この身体で君の性格だったら、あしはいつそ死んでしまうよ」

「俺も君の身体にはなりたくないね」

「お互い持って生まれたものが逆でなくて良かったな」

生ぬるい風が吹いた。何処からか蝉の声にまじり「にゃあ」と猫の声がした。

「猫の声を聞いたら何だか腹が減ってきた」

「なんだい、それは」

「支那では食うらしい。猫のほかにも、動物なら何でも」

「美味しい物ではなさそうだね。君は支那で何か食ってきたのかい」

「あしは食べなかった」

「珍しいな。怪物的な胃袋の君が」

「この胃袋がなければあしはとおの昔に死んでいたよ」

「それにしても、少し食いすぎではないかい」

「覚えているよ。あしが君と初めて飯屋に入った時の君の顔」

「だって君、あまりにも多く食うから」

「あんまり君の表情が硬いから、驚かしてやろうと思ったのさ」

「見てるこつちが吐きそうだったよ」

「君は繊細な男だからな」

「誰でも吐きそうになるさ。あれだけ目の前で食べられちゃあね」

「そうかな。いや、食う話をしていたら本当に腹が減ってきた」

「話を戻そう」

「どこに」

「夢だ」

「ああ」

「まったく見たことも無い君の泣き顔を思い出すのは、どう思うかい」

「どう思いつて、そりゃあ君の問題じゃあないか」

「そんな冷たい事を言わないでくれよ。君が泣いていたんだぞ」

「だからって、君の夢の中の事があしにわかるもんかね」

「だって、妙じゃあないか。気になって仕事に身が入らなくなる」

「仕事といえば、君は大層評判になっていたぞ」

「何がだい」

「散歩に出かけた時、高給取りの先生が、とか何とか言っているのを聞いた」

「ほう」

「しかし君みたいな偏屈がよく教師をやっているなあ」

「なあに、ただ教えれば良いんだ。聞く奴もいるし、聞かん奴もいる」

「きつと生徒は大変だろうね」

「文句は聞こえてはこないみたいだ」

「英語なんぞ、あしにはちんぷんかんぷんだよ」

「俺が教えてやろうか」

「君にものを習うのは嫌だなあ」

「昔から英語はからきし駄目だからな、君は」

「なあに、生まれてくるときに何処かへ英語の才能をおいてきたのさ」

頭上から軽快な足音が聞こえてきた。伺つては走り、また止まり、走りと、部屋を横断していった。

「おや、鼠かな」

「君、二階に甘いものでも置いていないかい」

「大丈夫だ。しかし布団を齧られたら弱るなあ」

「奴さん、何でも齧るからな。去年冬物を出した時、やられていたよ」

「夜は五月蠅いし。五月蠅いといえば君」

「なんだい」

「昼の様子はどうかかね」

「相変わらず、みんな集まってくるよ」

「それで君の身体のほうは大丈夫なのかい」

「君というよりは大分良いよ」

「そりゃあ悪かったな」

「冗談だよ。拗ねるな」

「拗ねてない」

「じゃあなんとってそんな喋り方なんだい」

「いつもこんな調子だ」

「そうかね」

のんびりと答えた男は脚にあるむず痒さを覚え、ぱしんとそこを平手打ちした。掌に何か捕らえただろうかと目の前に持ってきて目を凝らしてみたがそれも周囲と同様真っ黒で何もわからなかった。

「今のは君が悪いぞ」

「うん」

「俺が本気で心配しているのに、君は直ぐ茶化す」

「ごめんよ」

「うん」

「でもな、あしにだって言い分はあるんだぞ」

「なんだね」

「もしあしが茶化さないで真剣に病状について言ってみろ、直ぐに君は大いに心配してそれこそ気になって仕事に身が入らんだろう」

「まあね」

「ほらみろ。だからあしなりに、考えて茶化しているのだよ」

「うん。それでも」

「うん」

「こんな時ぐらいいは本音を出して欲しいものだね」

「こんな時とは」

「野暮だなあ、それを聞ukai」

「夏の夜か」

「違うよ。君の客人も、俺の客人もいない、君と俺二人で遠慮する事の無い状態の事さ」

「そしてお互いの顔も見えぬ暗闇で、だからこそころははっきり見せて欲しい、と」

「そんなところかな」

「ならばこの状況は普段言いにくい事を告げるのに良いかもしれない」

「そんな事、君にあるのかい」

「病状だよ」

「悪いのか」

「心配しないで、聞いてくれるかい」

「君が望むなら、しない」

「うん。これは昔からなんだがな、寝込む度に、何か書かなければいけないと気ばかりが焦るのだ」

「うん」

「はじめは男子たるもの何事が成さなければならぬ、そんな気持ちだった。世の中に名を残してやろうとな。しかし最近はどうだんと自分がとり憑かれているのではないかと思うようになってきたのだ」

「とり憑かれる」

「病気をするのは、あしにものを書かせるために、何か仕掛けたことじゃないかと思うのだ。いや、この考えが可笑しいという事は分っている。聞き流してくればよい」

「その考えによったら、君はどんどん病気がしたほうが良さそうだ」

「だけれども、そうしたらあしは直ぐにくたばってしまう」

「そうだね」

「くたばってしまったらもう何も書けない」

「もうその話はやめたまえ」

「なあ、あしは何時くたばると思うかい」

「そんな事、考えたくもないよ」

「常に予感しているのだ。もしかしたら、もうこの布団の中から目覚めることは無いのかもしれない、と思う」

「君らしくもない」

「そうだ、でも事実、これがあしの考えていることなのだ。なあ」
「なんだい」

「死ぬとはどのような感覚かな」

「一般論からいえば、死んだらもう感覚は無いね」

「君はどう思う」

「若いころは死とは全ての終わりで、この世の一切からの解放と考えていたな」

「鬼籍に入りたがっていたな、あの頃の君は」

「うん。あの世に逝けば何もかもが解決すると思っていた」

「解決しないと、気づいたか」

「考え方が変わった」

「どんな風にだ」

「あの世に逝ってしまったら、またこの世に戻ってきて結局一からやり直しをさせられるだけではないかと思ったのだよ」

「輪廻転生かい」

「そうだよ。まあ、俺が生まれ変わったとして、今の俺の記憶が無ければ、それで良い」

「うん」

「だけれども、もし何かがつきかけとなって今の俺の記憶が思い出されてみる、彼は俺の人生も、人の二倍の生きる苦しみを味わうんだぞ。そう思うと、可哀そうでも死ぬやしない」

「人の二倍の人生の楽しみを味わう、とは考えんのかね」

「楽しい思い出は記憶から滑り落ちて、もう何も残っていないのだ」

「確かに辛い思い出は印象深いけれど、いくらなんでも楽しい思い出がすべて抜け切る事はないだろう」

「俺の頭の中では、そうだ」

「君はやはり物事を暗く考えすぎだ」

「出来れば俺も楽天的に生きてみたいよ」

「君が楽天的だったら、それはそれで奇妙だな」

「酷いなあ」

「うん。でも君の考え方は仏教的だね」

「宗教は嫌いだよ」

「どういう意味だい」

「だって馬鹿馬鹿しいとは思わないかい」

「宗教がか」

「うん。俺は思うのだが、詰まる所神は人間の理想の表れだろう。釈迦しかり耶蘇しかり」

「ほう」

「ふと思い立つて真剣に考えてみたことがあるのだ」

「面白そうだ、先を聞こうじゃあないか」

「いいよ。俺は先ず何故神が、宗教が出来るのか考えた」

「救い、ではないかい」

「そうだ。仏教も基督教も、この世の不公平からの救済の物語なのだ」

「物語か」

「どんなに偉そうにしていたって、結局は人間が作ったものだろう。今どうにもならない不平等がある、どうしてもそれから逃れたい、それならば都合の良い話、まあこれが神であり宗教なのだがね、それを作ってこの苦しみから解き放たれよう、これが一つ目だ。あともう一つある」

「救い以外に、成り立ちがあるのかい」

「ある。自惚れが過ぎた場合だ」

「自惚れ」

「どんな人間でも少しは良い所があるものだ。しかし良い所だけの完璧な人間なんているわけがない」

「そうだね。君もあしも、欠陥在りだ」

「さて、ここに妙な奴が一人いる。自分を完璧な人間と思い込んでいる莫迦な奴だ。自分の欠陥には気付かず、良い所ばかりを並べたて、自惚れていた。結果、神になった」

「まってくれ、どういう事だい」

「あまりにも自惚れが過ぎて、自分は完璧な人間だと振舞っていたから、周りもそれを信じ込んでしまったのさ」

「成る程」

「詰まる所、宗教は逃げであり、思い込みなのだよ。そして弱いから宗教を必要とする」

「そう言えば、君は精神のほうは脆弱なのに、よく宗教に傾倒しないな」

「俺は己を信じているから」

「本当かい、そりゃあ初耳だ」

「誰でも自分の存在を尊く思わないから宗教に走るんだよ」

「でも、尊く思いすぎたら、今度は自分が神になってしまふのだらう」

「尊く思う事と、自惚れは違う。君、本居宣長を知っているだろう」

「徳川の世の国学者なら」

「その宣長だ。彼はね、徹底した現実主義者だった」

「うん」

「人間は死ねば暗く穢れた陰府の国に行ってしまうのだから、死を考えず現世の幸福や生きがいを追求すべきだ、と彼はこう言った」

「うん」

「これが尊く思う事だ」

「どういう事だね」

「つまり人生の全てを享受した上でその楽しみを追い、生を肯定的に生きる、これが尊く思う事だ。自惚れは違う。自惚れている奴に、生の全体像なぞ見えているものか」

「見えていたら、自惚れはしないだろうね」

「そういう事だ。俺は己を尊く思っている。だからいつまでたっても、神の奴隷にはならないよ」

「神の奴隷か。それはちと言い過ぎではないかい」

「いいや。的を得てると自分では思っているがね」

「徹底してるなあ」

「俺は神の奴隷になるぐらいだったら、死んだほうが良いね」

「死んだほうが良い、か。なあ君」

「なんだい」

「あしも考えていることがあるのだ」

「この際だ、言ってしまえよ」

「うん。あのな、魂は何なのだろう、と時々考えこむのだ」

「何とは」

「先代まで、人魂が身体に宿っているという事が定説だったでないか。死んだらそれが身体から抜け出て行く。しかし最近はどうもいかないだろう」

「人魂なんて、無い、か」

「いや、魂は確かにあるのだ。ただ、それが何処にあって死んだ後は果たしてそれがどうなるのか、それが気になって」

「難しい問題だ」

「はじめは脳にあると思った。物事を考える部分だし、ここをやられたら死んでしまう。しかしそう考えると、心臓だって突かれでもしたらもう駄目だ。だから心臓でもおかしくないと思った」

「魂が心に宿るとするのは、しっくりとくるね」

「だろう。しかしそこで何故人は死ぬのだろうという疑問がでた。

脳をやられても心臓をやられても、死ぬ。考えているうちに、二つの死からある連想をしたのだよ」

「ほう」

「うん。思いついたのは、血だ」

「確かに脳でも心臓でも刺せば血がでるな」

「それどころか体中、どこを刺しても血が出るだろう」

「うん」

「あしはこれだ、と思った」

「血が、魂か」

「そうだ。血は四肢に充足している。つまり、魂は全身に在るのだ」

「成る程。だから幽霊は人の形をとっているのかい」

「それは茶化しているのか」

「いいや、本気だよ」

「そうかい」

「魂か。俺もこの問題については考えてみたことがある」
「ほう」

「君みたいに魂の在りかではなくて、魂そのものについてだけだね」

「在るか、無いかという事か」

「いや、何か分かっていないだけで、魂と呼ばれるものは在ることには在るのだ。観念的なものだがね。ただ実在の話になると」

「無い、とも言えるのか」

「そうだ。先ず魂に重さがあるのかどうか、それを真面目に検証しなければならぬ」

「在る、のだったら重さがあるはずだからな」

「しかし肝心の在りかがわからない」

「血を量ってみたらどうだ」

「冗談を言うんでないよ。血の中の成分と魂とを、どう分離させるんだ」

「やはり、となれば魂は観念の存在か」

「俺もそう思った。しかし、それだとある事に説明がつかなくなる」
「なんだい」

「あの世から戻ってきた人と幽霊さ」

「君、幽霊を信じるのかい」

「先ほどの神の成り立ちのように明確な説明をつける事は出来ないけど、これだけ世の中に知られているものが、いないわけないだろう」

「それはどっちだい」

「どっちとは」

「また観念の話か、それとも実在か」

「実在していると思うよ」

「神の存在を信じない君が、幽霊は信じるのかい」
「変かな」

「面白い」

「まあ、幽霊のほうはよいのだ。問題はもう一方」

「あの世から帰ってきた、臨死体験だね」

「そう。彼らはさ、布団に横たわっている自分を見たというだろう」

「布団の脇では家族が泣いている」

「その時身体から何かが分離している状態にある」

「身体を見ているほうか」

「それが魂だ」

「身体からの魂の分離か。あしは精神と思ったが」

「精神を含めての魂だ。いや、同義だと言ってよい」

「身体から抜け出る何かは、精神とでも魂とでも呼べる、か」

「むしろ呼び名は今論点ではないのだ。魂がそこに在ると言う事だ」

「観念の世界のものではなかったと」

「でないと身体を見る目はないだろう。結論、魂は実在する、だ」

「重さは量れないにしてもか」

「そこでだ。魂には重さがないと思うのだ」

「なんだい、さつきはあるような話し方をしていたじゃあないか」

「無いのだ。軽いのだ。何故だと思う」

「謎掛けかい」

「そんなに大層なものではないよ」

「観念の存在だから、という答えは使えないしなあ」

「簡単だ。宙に、浮かんでいるからさ」

「あはは、そりゃあ確かにそうだ」

「まあ、それが俺の魂に対する見解だ」

どうせなら、もう少し魂の話をしよう」

「いいよ」

「ではね、魂は一体何処へ行くのだと思う」

「あの世だろう」

「ではあの世とは何処だい」

「冥土だろう。おい、では冥土は何処にあるかなんて聞かないでくれよ」

「先に降参するのか」

「そんな事、死んでみると分らんし、第一俺は冥土の存在にも不服なんだ」

「本当に宗教を嫌っているなあ」

「まあ本当に冥土があるのかもしれないがな」

「どっちなんだい」

「君の話のしやすいほうで良いよ」

「なら、冥土はある事にしてくれ」

「いいよ」

「魂は冥土へ行く。それで終わりかい」

「輪廻転生するのだろう。前世と現世と来世にわたって死と再生を繰り返す、だったかね」

「そうだ。では、基督教ではどうだ」

「基督教」

「今のは仏教の話だからな」

「基督教では魂は天国へ行くんじゃないのか」

「あしもよくは知らんがね。こっちでは魂の生まれ変わりはしないのだ」

「死んだら、終わりか」

「そう。さて、面白いと思わないか」

「何がだ」

「この両者の違いだよ。君風に言うならば、同じ救済の物語なのに」
「うふふ」

「どうした、急に笑いだして」

「いや何、基督教の天国が日本ぐらいの面積しかなかったら、さぞ死者は窮屈だろうと思ってね」

「あはは、確かにな。人口は増える一方だし」

「同じ大陸で出来たもののなのに、こうも違うのだな」

「きつと生活環境の違いから来ているのだろうね」

「おや、そこで偉そうな御高説はないのかい」

「ないよ。君こそ大好きな宗教の話だ、何かないのか」

「あえて一言言わせてもらえるならば」

「なんだね」

「俺にはどちらも無用の長物だね」

「そりや、君らしい」

みーんみーん、と煩く鳴いていた蝉の声が突然ふつりと途切れた。

「死んだかな」

「蝉の季節もそろそろ終わりかね」

「最期の最期まで嫁さん探しか」

「良いなあ」

「嫁探しがか」

「違うよ。生きて、次の世代へ命を繋いでいくことしか考えていない所だ」

「無駄な事を考えずにすむというわけか」

「そうだ。考えて、自棄になる事もなかるう」

「分らんよ、意外と彼らはやけくそかもしれない」

「それでも、嫁さん以外は眼中にない」

「おい」

「なんだい」

「あしは別に、考える事は無駄ではないと思うよ」

「それは俺だつてそう思つてはいるさ。だけれどね、時々馬鹿らしくなつてくるのだ」

「どういう事だね」

「どんなに偉い先生になつたところでね、待ち受けているのは死だ。人間として、いや生物として生まれたからにはこれだけは避けられない」

「そうだね」

「それならば、変なことをごちゃごちゃ考えて生きてても、本能のままに生きてても、同じだと思わないかい」

「結果はそら確かに同じだ」

「確かに世の中は便利になつてきているよ。しかし、複雑になり過ぎていると思わないか」

「確かにね」

「それもこれも、人間が考えた結果なのだよ。単純だつた世の中を、自分自身で難しくしていつている」

「開国してから、特にそうだろうなあ」

「今この国は急激な変化を遂げているだろう」

「うん」

「俺はね、怖いよ。何時か人間が世の中を複雑にしすぎて、手に負えなくなる時が来るのではないかと思うのだ」

「未来の話だ」

「近い未来かもしれない」

「いいや、あし等が死んだ後の話だよ、それは」

「何故言い切れる」

「そう興奮するんでないよ。あのな、君はきつと今の日本の回転が速すぎるからそう思うのだ」

「そうだよ」

「この回転は何時かゆっくりとしたものに必ずなる。そしてその後百年は何も起こらない」

「何を根拠に」

「欧州を御覧。今日本は彼の国々に追いつこうとしているから、猛回転しているのだ。全て真似おえれば、速度も落ちるさ」

「成程。では、百年というのは」

「英吉利だよ。君、あそこで産業革命がはじまったのは何時か知っているか」

「そういう事は君より俺のほうが詳しいよ。西暦で一七六〇年頃だ」

「そう。今日本で産業革命がやっと始まったぐらいだから、その頃の英吉利は今の日本のような状態にあったのだろうと思うよ」

「国家の転換期だね」

「それから百年以上たった今、英吉利はとんでもない状況にあるかい」

「そういう事か。でも君」

「うん」

「その百年の間の技術を令、日本は真似ているのだから、全て真似し終えたら英吉利と同じ線に立つんではないかい」

「だね」

「そうしたら、保障はないではないか」

「君も心配性な男だなあ」

「何故溜息をつくんだい」

「君ね、こんな時はあしの説に穴を見つけてもほじくらずに騙されておくものだよ。そうしたほうが、君も楽だろう」

「そりゃ悪かったね」

「まあ、いいさ。こんな片田舎でごちゃごちゃ言ったところで日本の流れは変わらんし」

「伊藤首相の元勲内閣が頑張ってくれるかな」

「飢えては食らい、楽しくて飲み、穏やかなる眠りに安んず」

「伯楽天か」

「結局、これだよ。あしはこれに賛成だ」

「君の場合、飢えなくても食っているじゃあないか」

「自分に正直に生きているのさ。俳句をしたければする、食いたけ

れば食う」

「となれば、君はエピクロスなぞには師事できないな」

「誰だい、それは」

「希臘の哲学者だよ。彼はね、快樂の源は食べることにあると言った」

「良いじゃあないか」

「ところがどっこい、彼は無制限に食べる事は勧めなかったのさ。むしろ害があると言って、水とパンだけの質素な生活を好んだ」

「何故だい、彼は苦行僧か何かだったのかい」

「違つよ。彼は肉体的な快樂への欲望を統制する事で精神的な快樂を得ようとしたんだ」

「信じられないね、肉体と精神は別物じゃあないか」

「エピクロスの場合はそうじゃあないのさ」

「哲学者に、ろくなことを考える奴はいないな」

「おや、確か君は一時哲学を志していなかったかい」

「もうやめだ、あんなもの。やはりあしには俳句だよ」

「それが君の一生の仕事か」

「そうだ」

「良いなあ、断言ができて」

「君はまだ見つかつていないのかい」

「教師でない事はわかっているのだ。やりたくてやっているわけではないし」

「では、やりたい事はないのかね」

「文学をやりたいとは思っている。だけれどなあ、今のこの状態じゃあとても」

「教師をやめなければ、つとまらんか」

「つとまる事はつとまるだろうよ。しかしだね、なまじ教師として上手くやっている」

「うん」

「英語との付き合いも出来ていると思う」

「評判の高給取りの先生だからね」

「それならば本当はこちらが本分なのではないかと思ってしまうのだ」

「さて、さつき教師ではないと分かっていると云っただろう」

「言ったさ。でもそれは俺のただの願望であるだけかもしれない」

「文学への志は、まやかしだと」

「うん」

「莫迦だなあ、君は」

「どこがだよ」

「考えすぎだよ。適正なんて関係ないだろう。やりたければやる、それで良いのだ」

「でもそれでは飯が食えないかもしれない」

「好きであれば、どうとでもなるものさ」

「そうかな」

「そうだよ。それに、君にはまだ時間が多くある。あしのように、急ぐ必要もないだろう」

「軽々しくそんな事を言うんじゃない」

「軽々しく言わなくて、どうする」

「君は死ぬことが怖くないのか」

「もちろん、怖いよ」

「では何故そんなに飄々としていられるのだ」

「そうだね」

「俺は時々君という男がつかめないよ」

「あしも、君という奴ほどわかりにくい男はいないと思うよ」

「何を言ってるんだい。君は他人を選び好んで付き合いをするじゃないか。そんな中で一体誰と俺を比べているんだい」

「それを言うならば、君だって自分から他人に近づいていくことはしないだろう」

「必要がない。今の交友関係で俺は満足だ」

「あしも同じさ。君という友人を持てて、十分」

「俺は君だけじゃあ満足できんぞ」

「照れるな、分かっているよ。君もあしも、他に大切な友人がいる、これで良いかい」

「うん、まあいいよ。それで、どうなんだい」

「死ぬ事かい」

「うん」

「常に予感はしていると、さっきも言った」

「うん」

「だけれどね、まだ死ぬ気はしないね」

「死ぬ気がしない」

「死んでやらないさ、まだ。あしにはやる事があるもの」

「気持ちの持ちようか」

「そうだよ。君ももう少し楽にかまえたまえ」

「楽にねえ」

男の呟きの後に、どさりという音がした。

「これで良いかい」

「君、寝るのなら二階へ上がりたまえよ」

「なあに、寝ているのではない。楽になったのだ、楽に」

「形から入る男かい、君は」

「どうかね。それでもこれだけ広ければ二人で寝ても文句はあるまい」

「確かに学生時代の下宿より数段良いな。おい、君は何畳で暮らしていたんだっけ」

「是公と二人で二畳。一人一畳だな」

「よく暮せたなあ」

「人間どうとでもなるものだよ」

「なんだい、余裕が出てきたじゃあないか」

「そうだね。この姿勢は案外良いのかもしれない」

「じゃあ一寸あしも試してみようか」

「駄目だよ。君がこれ以上肩の力を抜いたらどうなるか」

「試してみたら、面白いかもな」

「駄目だ。君、今横になつたら寝てしまつたらう」

「君こそ、今目を閉じているのかい」

「閉じてないよ。こんな真つ暗じゃあ、閉じていても開いていても同じだ」

「閉じてはいけないよ。閉じるぐらいなら体を起こせ」

「俺に寝て欲しくないのかい」

「別にどちらでも良いがね、君、何かあしに聞かなかったかい」

「たくさん聞いたね」

「そうではなくて、あしをを起こした理由だ」

「ああ、夢の話だね」

「ずいぶんとそれてしまつて、何だかよくわからなくなつてしまつたよ」

「何の事を聞いていたっけ」

「確か君が夢の内容を話して」

「そうだ、君が泣いていたのだ」

「ああ、何故泣いていたかだったね」

「何故だい」

「何故といわれてもなあ」

「何か、悲しかったのかな」

「ただ悲しいで、あしが泣くかな」

「誰か死んだとかはどうだ」

「縁起でもない」

「俺が君の死んだ夢を見る時点で、縁起も何もないさ」

「確かに。それで、死人候補は上がったかい」

「おや、まだ続けるのかい」

「こうなつたらしらみつぶしにいくよ」

「そうだね、親か妹か友人か」

「そりゃあ知り合い全てにならないか」

「死んでも悲しくない知り合いぐらいいるさ」

「酷い男だな」

「君にはないのかい」

「あるよ。でも俺は、人が死んでも泣かないかもしれない」

「嘘をつけ。君のような男が、泣かない事があるかい」

「少なくとも、君が死んでも泣かないね」

「ほう、酷いじゃあないか。何故だい」

「もう六年間も経験してきたからな」

「ああ、そうか。何回もあしは死んだのだったな」

「そうだよ」

「この分だと、あしが本当に死んでも君は夢だと思うかもしれないな」

「あはは、そうだね。そうして必死に起きようとするかもしれない」

「夢ではないと気付くまで、どのぐらいかかるかな」

「きつと遠くにいるだろうから、帰ってきて君の墓前に立つまでかな」

「長いなあ」

「短いよ。これまでの夢の時間と比べたら、ずうっと」

「なんだ、やっと本当にくたばったのかと思うだろうね」

「安心するかもしれない。やった、もうあのつまらない夢を見なくて済むぞ、と」

「君は墓の前でにやにや笑うのを必死でこらえているのさ」

「だけれど俺はこんな時にかぎってお得意のむっとり顔が上手く出さない」

「だから奴さん、手で口元を隠している」

「それを見た弔問客が言うんだ。夏目君を御覧よ、絶句するほど悲しんでいる」

「君はそんな声を聞いてますます愉快になるのだ」

「おや、上手く勘違いをされているようだ、どうしたものかね」

「そこで君ははたと思いつく。そうだ、ここで涙なんかちよろちよと流してみたら、まさにふさわしい雰囲気じゃあないか」

「俺は少しうつむいて、そら涙を流してみせる」

「ほら夏目君、今度はたまらなくなつて泣き出したよ、おかawaiiそ
うに」

「墓の下から君はそれを見て笑っているのだ」

「おい、やはり君は酷い男じゃあないか。そら涙を流すだけで、本
当は笑っているだあなんて」

「だけれども俺にも弔問客にも死者の声は聞こえない」

「かくしてそこは悲しい死の一風景になるのであった」

「ああ」

「どうした」

「もしかしたら、君が流していたのはそら涙かもしれないね」

「流すだけ無駄だねえ」

「女はよく流しているではないか」

「あしは女子ではないよ」

「見ればわかるよ。男でも、あることにはある」

「そら涙がか」

「うん。そうだ、そら涙に違いない」

その時だった。突然さつと暗闇が切り裂かれ、光が部屋の中に射
し込んできた。

「やあ、雲がきれたな」

「ずいぶんと明るい月だね」

布団の上に座っていた男は立ち上がり、蚊帳から出て空をのぞい
た。

「君、来てみるよ」

「そんなに面白い月かい」

のろのろと起き上がり、同じようにして蚊帳を出ると、男に促さ
れるように空を見上げた。

「満月に近いなあ」

「あともう少しだね。ああ、月と言えば団子が食いたい」

「また食い物の話かい、あきれたね」

「良いじゃあないか。そうだ、満月になったら月見をしよう」

「良いね。酒と肴と」

「酒ねえ。だけれど君は直ぐに酔うだろう」

「酔っても不都合はないだろう」

「まあね。ただ、君がつぶれて寝てしまわないかが心配だ」

「それは君との話の面白さによるね」

「それで、そうなんだい」

「何がだね」

「夢の中のあしの涙は、そら涙で良いのかい」

「良いさ。君がそうそう真面目に泣くわけがないもの。君はそれで良いか」

「あしには別に異存はないよ」

「うん。さてではそろそろ二階へ戻るとするか」

「もう戻るのかい」

「なんだ、すっかり目でも冴えてしまったのかね」

「そうでないよ。ただ、あまりにも君があっさりと戻ると言うから」

「どうも月に話の腰を折られてしまったからな」

「明るくなつては話す気もしないかい」

「そんな所だよ」

「夜行性の動物のようだね」

「あはは。もしそうだったら、教師の仕事はしてないよ」

「そうだ、君、明日の仕事は大丈夫なのか」

「なあに、もともとあまり働いていない頭が普段以上に働かなくなるだけさ」

「不憫だなあ」

「そうでもないよ」

「違う、君に習う生徒のほうだ」

「それならば、もっと心配するにおよばんよ」

男が大きく欠伸をした。それにつられ、隣に立っていた男も欠伸をした。

「さあ、寝よう」

先に欠伸をした男が蚊帳の中に入り、のそのそと階段まで歩いていく。

「それじゃあ、御休み」

「御休み」

とんとんと階段をゆっくり登って行く音がふと男に最後の一言を思い起こさせた。

「おうい、愚陀仏君」

「なんだい」

ぴたりと足音が止み、一拍置いて返事が返ってきた。

「もうあしを殺さないでくれよ」

冗談混じりにさけんでみたら、あははと笑い声が家じゅうにこだました。

月はそのまま一晩中、こうこうと照り続けていた。

03（後書き）

最後にネタバレをすると。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、作中で会話している二人の男は夏目漱石と正岡子規です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9682p/>

夜談

2011年1月7日10時10分発行